

ぐるっけ

平成六年七月二十七日第三種郵便物認可
平成十七年七月一日発行(毎月一回一日発行)
第十二巻第三号(通巻第一三五号)

鈴



ぐるっけ

俳句雑誌

GLOCKE

第135号

7. 2005

刻打人形

品川 鈴子

離島して越えし渦潮数知れず

苜蓿に鑿^{のみ}彫り荒き開拓碑

農園をさ迷ふ吾も虻となり

猫が擦り寄る城山の木下闇



百足虫には熱湯浴びせ寺句会

寺男萎え石楠花を軍手摘み

遍照堂蔀の裡は五月闇

亡き名呼び掛ければ蝶の蹤ついてくる

時の日も刻打ときうち人形にんぎょうぎくしやくと

梅雨籠りひがなパソコン空作動



玉 鈴

香川 細川 知子

春うれひ一夜庵へとひとり行く
母の背を超えて詰襟入學す
花辛夷氣張らずまとふ木綿縞
春埃掃きて水拭き蔵の床
地味な色好きなることも春うれひ

兵庫 細野 恵久

青鷺を何かの旗と言ひ張れる
庭石のでんと据ゑられ紅蜀葵
青大将一枝を占めて弛みをり
黄槿はまぼろを見る母と子の目の高さ

香川 松井 洋子

鉄格子ある病棟や梅白し
ほころびし紅梅に薬ぎっしりと
乳母車の嬰も見入りし雛の店
観覧車の高みに揺らる涅槃西風
ゴンドラに一蓮托生山笑ふ

吟

愛媛 松本 恒子

廢屋に石白ひとつ草茂る
菜の花に囲はる家の喪の灯点く
卒業す表彰状を枕辺に
春光に点字ブロック角曲る
鬼投げし島に佇み遠霞

愛媛 三浦 如水

涅槃の図より極彩の地獄の絵
細文字の女表札春の路地
古都おぼる豊かな胸の仏達
春の街ビルに貼り付く窓磨き
長閑のどけしや又聞かさるる同じ愚痴

愛媛 三浦 澄江

飾るものなくて男の春帽子
火事跡に炎に堪えし梅開く
春寒き堂に極楽地獄の絵
春喫茶乳房ゆたかな志功の絵

兵庫 三枝邦光

のどかさやしきりに動く馬の耳
木道の岐れゆく先春の虹
鉄塔の碍子がきらり春夕焼
春愁や齒科受付の吊り鏡

兵庫 水野範子

春炬燵心寄せ合ふ寡婦仲間
野遊びにジャンケンの子を見失ふ
地球博花の宿りを子の元に
雛の客御洒落念入り大広間

香川 三橋 早苗

蔦の芽も球児迎へる甲子園
入学の準備に含む化粧品
落花舞ひ母の小言はまだ続く
蛇二匹材匂材と飛び移る
浜風に一触即発松花粉

和歌山 宮原利代

蕾固き大阪城に花見莫蔭
外人の挨拶抱擁花の下
金ボタン胸に輝く新入生
船名はおほかた屋号春の浜

茨城 三輪 慶子

留守宅は震度五に遭ふ花の雨
待ちてこそ花ひとしおの都なり
茶の芽立つ主人の退院待ちかねて
さらし独活客を迎へて更くる夜

愛媛 村上 和子

定年は次のステップ揚雲雀
定年に春一番の向ひ風
定年を桜の下で祝ひたり
定年や庭に長け初むさくら草
定年の後のちはどうかあれ桜狩

薬草歳時記

(一三四) ミヨウガ (茗荷)

須賀悦子

茗荷汁にうつりて淋し己が顔

村上 鬼城

「茗荷を食べると物忘れがひどくなる」などと真しやかに言われた事を長い間信じていたのですが、根拠のない迷信と判った今でも、茗荷を食べるときには冗談に「これを食べたらみんな忘れられるかもね」と笑いながら食べます。茗荷の香りとほろ苦い味は何か心を奪われてしまうかのよう思うのです。

すさまじや庫裏のうしろの茗荷竹

正岡 子規

四月頃、柔らかい地を分けるように顔を出す茗荷竹は、毎年同じところによきによきと伸びて草丈は四〇センチから一メートルにもなります。

六〜七月頃その脇にちよこつと芽をだすのが茗荷の子、花穂です。これを食用にしますが消化が良くなることなので、薬味やつまとして又、酢の物、和え物、サラダな

ど生で食べたり、味噌汁に入れても美味しいものです。昔から食事療法として茗荷は神経痛、リウマチに効果があると云われています。

薬用部分は花穂（囊荷（シヨウカ）、根茎、茎葉、若芽、必要時に採取、水洗いして陰干しにします。

成分に芳香性辛味精油が含まれ腎臓病や生理不順にも良いといわれ、煎じて使われます。又根茎と葉は、凍傷、しもやけのかゆみに患部を温めながらその煎汁で洗って、この陰干しした茎葉で湿布すると効果があるといえます。

つぎつぎと茗荷の花の出で白き
隠るる如茗荷の花を土に掘る

高野 素十
橋本多佳子

初秋の頃、紫脈紅緑色の重なつた苞葉の花穂の間から淡黄色の大きな花が咲きますが、食用としては香りもなくありません。地下に横行する根茎は多節多肉で多年草ですが、地上の擬茎は一年草です。毎年芽を出し増えますので家庭に栽培すれば重宝します。

季語として、茗荷竹は春、茗荷の子、茗荷汁は夏、茗荷の花は秋となります。

参考文献 「原色牧野和漢薬草大図鑑」 北隆館
著者略歴 神戸薬科大学卒

茗荷 (キョウガ) [ショウガ属] (しょうが科)

Zingiber Mioga (Thunb.) Rose.

中田
孝子
画

薬用部分：
根茎
花穂
若芽
莖



茗荷汁ほろりと苦し風の暮

日野 草城

日は宙にしづかなものに茗荷の子

大野 林火

盗まるる庭に見てをり茗荷の子

石川 桂郎

金色に茗荷汁澄む地球かな

永田 耕衣

夕月や梅酢に漬けし茗荷の子

草間 時彦

朝餉に火かけて茗荷の子をとりに

宮下 翠舟

茗荷の子白をにじませ紅にじませ

加藤 三七子

茗荷の子顧みられぬ影を置く

西川 雨州

湯上りの指にも似たり茗荷の子

北島 明子

ちゅんちゅんと鳴き出しさうな茗荷の子

塩出 眞一

ぐろっけ

鈴の奏

品川鈴子選

永き日をやりかけの家事ばかりなる 愛媛 福島 松子

春光の降り注ぎつつ納骨す

立ち寄りて桜湯一服お相伴

涙の訳ぼつりぼつりと春の闇

チューリップ芯から笑い声のする 兵庫 山本 歌子

朧月とりだしてみる浜の石

パン種のふくらみてをり入学す

花うくる生命線のたしかなり 兵庫 長瀬 節子

庭に出す卓球台に春日差

パンダから離れぬ子等に花吹雪

花の下象足あげて葉ぬる

頂までこぼし点々と有馬山 大阪 河村 武信

桃の花景徳盃に透かしたり

あたたかに龍泉窯の唇あたり

透かし彫る陶枕もあり景德鎮

黄楊の花筆刻定まる線の波 大阪 木野 裕美

婚の荷の占むる座敷や春灯し

すれ違ひざま野焼の香作務衣の僧

一山は薄紅の花緋

花の冷え蠟涙しるき観世音

ライラック郵便受けを塗り替へる 愛知 市川十二代

雪柳隣家に届く婚荷物

金縷梅ひよこの柄の襦袢縫ふ

花筵太悼の箱置かれある

春昼や三度の失策目をつぶる 兵庫 明石 文子

花万朶池は小さくなりにけり

入学時機の広さもてあます

山笑ふ公開講座に応募して 兵庫 内山 芳子

黄水仙土に還りし犬のこと

冴え返るレッスン室の楽器たち

過疎村に外人一家山笑ふ

切り株に桜一房咲き出づる 兵庫 平川 倫子

花に祈る母の病の篤くして

母眠る傍に一枝の花褪せし

秀 鈴 記

巻頭 三句 品川鈴子 評
四句く十五句 坂口美保子 //

*選句は全て 品川鈴子

永き日をやりかけの家事ばかりなる 福島 松子
家事というのはあれこれと際限もなく、完璧にはし尽くせ無いのが主婦業かと思う。新婚で共働きの頃先ずそれに驚いた私は、句友への葉書に「家庭とは何と雑用の多いことかと驚いています」と書き送ったら、早速の句会で誓子先生がその文言通りに真似て、「そんなに忙しいの？」とにつこり新米主婦を労りながらからかったものです。

チューリップ芯から笑い声のする 山本 歌子
チューリップの鮮やかな花を覗きこんで見ると、雄蕊と雌蕊が仲良く揃って、華やかな若者らのパーティーもたけなわの様子、楽しい笑い声が聞こえてくるような気さえする。幼い頃私が大好きだった童話は花の裡で眠っている「親指姫」でした。

花の下象足あげて葉ぬる

長瀬 節子

ふるさどから遠く捕らわれの象は、重い身を支える足を痛めて、葉を塗ってもらおうと。檻に群がる人々の面前で、やおらバランスを保つ三本足の巨体に、せめてもの慰めは異国の花蔭。時おり花びらがお見舞のように降ってくるばかり。

透かし彫る陶枕もあり景德鎮

河村 武信

冷房の世の中でも涼しい風の通る和室で、陶の枕で昼寝することは最高の贅沢。ましてこの陶枕はかの有名な中国江西省にある景德鎮窯、おまけに美しい透し彫りがある。どなたがお使いになるのでしょうか。

一山は薄紅の花紺

木野 裕美

一山は、と花で吉野山と思う。満開の桜が吉野の谿を埋めた景色はずばらしい。その中に濃い緑の杉林が点在する。花紺はこの風景に最もふさわしい形容だ。

花筵太悼の箱置かれある

市川十二代

花見には桜狩、観桜と色々あるが花筵と来ると庶民的である。巻莫産を幾つか延べて花見の宴の座敷が出来、太棒三味線も用意されている。宴も酣になると若者が津軽三味線を賑やかに掻き鳴らす。

花万朶池は小さくなりにけり

明石 文子

池に沿って植えられた並木の花を愛でながら歩いて来て振り返ると、池の面すれすれに満開の花が枝をいくつも伸ばしている。今まで見慣れた広々とした池が「小さくなりにけり」と言い切る程狭められて見えた。花万朶がぴったりの見事な桜で。

過疎村に外人一家山笑ふ

内山 芳子

山は笑ふ、滴る、粧ふ、眠ると何れも季語である。春になっても淋しかった過疎の村に家族の多い外国人一家が引越して来た。眠りから覚めた山は笑い喜びに満ちている。季語がうまく決まっている。

花に祈る母の病の篤くして

平川 倫子

この句からは、どうしようもない淋しさが伝わって来る。こんなに美しく桜が咲いているのに母上のことが頭から離れない。お祈りが通じて何事もなく花の時期が過ぎます様に。初夏の頃にはお顔の色も好くなります様に。

花人を一攫ひして終列車

辻 雅子

中七の「攫ひして」がとても気がきいて面白い。攫うと云うむつかしい字の意味を辞書で見ると、人の油断をみて奪い去る。波に奪われると書いてある。どうも悪者がいる様な字だ。花に浮かれてこの時間まで充分楽しんだ花見の人達が駅に溢れている。悪者でない終電車に攫われてほっとして家路につく。誰もいないプラットホームにはお酒の香が漂っている。

(以下略)